



Title	「生きづらさ」を論じる前に：「生きづらさ」という言葉の日常語的系譜
Author(s)	藤川, 奈月
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要, 138, 359-374
Issue Date	2021-06-25
DOI	10.14943/b.edu.138.359
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/82164
Type	bulletin (article)
File Information	21-1882-1669-138.pdf



[Instructions for use](#)

「生きづらさ」を論じる前に

— 「生きづらさ」という言葉の日常語的系譜 —

藤川 奈月*

【要旨】 本論文は、「生きづらさ」という言葉の系譜を「専門領域」に留めずに辿ることを試みたものである。まず、これまで「生きづらさ」という言葉がいかなる文脈でどれほど用いられてきたかを新聞記事で概観したところ、この言葉に関する三つの仮説を得られた。そして、これらの仮説を掘り下げるため、若者に関する記事に焦点を絞り、言説の展開をより詳しく検討した。その結果、次のことが明らかになった。①「生きづらさ」という言葉は「問題」との関連からのみで読み解かれるものではないこと。②「生きづらさ」を「問題」とみなすかどうか、「問題」とみなすならばそれをいかなる「問題」とみなすか、それをいかなるアプローチで〈どうにかし〉ようとするのか、といったことは、単一的に捉えられないということ。③「生きづらさ」という言葉にとって2007年～2009年が転換期だったこと。これらのことは我々に「生きづらさ」を問題視すること自体を問い直すよう促す。

【キーワード】 生きづらさ, 新聞記事, 量的分析, 質的分析, 問題化

1. 問題の所在

「生きづらさ」という言葉をよく見聞きする。試みに国立国会図書館サーチにおいて「生きづらさ」という語を検索すると、2013年から2017年までの5年間だけでも274件、その言葉をタイトルに含む本や論文などが出版されていることが確認できる。そして、そこで語られている物事を見ると、発達障害やセクシュアルマイノリティー、ひきこもり、いじめ、薬物乱用など、枚挙にいとまがない。

教育学や心理学、社会学、福祉学などの領域、また、社会福祉の実践現場やルポルタージュの記者たちの間で、「生きづらさ」とは何であるのか、「生きづらさ」とはいかなるものなのかを論じる研究や考察が積み重ねられている。そうした論考の中には、これまで「生きづらさ」という言葉を用いて何がいかに語られてきたかということに基づいているものがある。

藤野(2007)は、「生きづらさ」「生きにくさ」という言葉が社会的実践や研究の場でいつ頃からどのように用いられてきたのかということ、雑誌記事索引を利用して調査している。それによれば、「生きづらさ」は1981年の日本精神神経学会総会において「主体的社会関係形成の障害と抑制」として語られたのが最初であり、「生きにくさ」は1997年に『世界』(岩波書店)において現代社会に生きる若者の状況を読み解こうと「〈生きにくさ〉という問題」という特集記事が組まれたのが最初である。そして、2000年以降この論文の執筆時点に至るまで

* 北海道大学大学院教育学院修士課程修了
DOI: 10.14943/b.edu.138.359

「生きづらさ」「生きにくさ」という言葉をタイトルに掲げる論考は、数・領域とも拡大してきたという。藤野はこれらの論考を概観した結果、「生きづらさ」並びに「生きにくさ」という言葉は「今や多様な領域で語られる言葉となっているものの、それらが具体的に何を指しているのか、あるいは抽象的にどのような定義があてはまるのかという共通の見解めいたものはまだないように思われる」と述べながらも、その論考のいずれもが「程度の差はあれ『生きづらさ』『生きにくさ』を『社会』や『環境』や『時代』との関係で捉えようとしている」と指摘している。

山下（2012）は、精神医学・福祉の領域、教育現場、社会学領域、運動家・実践家らによって語られてきた「生きづらさ」の先行研究をレビューし、次のように整理している。もともと「生きづらさ」という言葉は、医療や福祉の分野で「『目にみえにくい』障害」を包摂するために用いられるようになった。それから、教育現場においても、発達障害のある子どもや不登校の子どもなどとの直接的な関わりにおいて、「生きづらさ」に焦点が当てられるようになった。そこでは、仲間外れや障害、虐待それ自体の困難さだけではなく、努力しても問題が解決しないことや、解決できない自分を責めたり、無力感を感じたりすること、さらに自分の状況や、ありのままの自分を周囲に理解してもらえないことなども子どもの「生きづらさ」と捉えている。近年になって、社会学領域や運動家・実践家らによって「いわゆる『普通』の人々」の「生きづらさ」に焦点が当てられるようになり、自己責任を強調する社会構造や、空気を読みあうような人間関係の特徴が、「生きづらい」状況を生み出しているというアプローチがみられるようになってきた。山下はこれらのことを踏まえ、「生きづらさ」というものが、「その人にとって重要な生活諸課題の達成が何らかの理由によって阻害され、いまの生活の状況では充足されず、自分の取りうるあらゆる対処方法を講じても状況の改善の見込みがなく、これ以上自分ではどうしようもできないところまで追い詰められた状態」だと論じている。

これらの先行研究は、いわゆる「専門家」「専門領域」の中で「生きづらさ」という言葉がいかに使われてきたかということ調べ上げ、「生きづらさ」論の前提としている。だが、ここで留意すべきは、「生きづらさ」という言葉を使用しているのは「専門家」「専門領域」に限らないということである。貴戸（2014）が「生きづらさ」という言葉について「個人化・リスク化したキャリアや人生をめぐる苦しみを、日常語で表す手段」だと述べているように、この言葉は、専門用語ではなく、誰もが使うことのできる一般的な言葉である。したがって、「生きづらさ」という言葉の系譜から「生きづらさ」を論じるにあたっては、それが日常語として使われてきた展開をも知る必要があると考えられる。しかし、「専門領域」外も視野に入れ「生きづらさ」という言葉の系譜を整理した先行研究は管見の限り見当たらない。

2. 研究目的・資料

以上のことから、本論文は、「生きづらさ」という言葉の系譜を「専門領域」にとどめずに辿ることを目的とする。

以下、まずは、一般社会においてこれまで「生きづらさ」という言葉がいかなる文脈でどれほど用いられてきたかを概観する。そして、そこで得られた仮説を掘り下げるために、次に、

「生きづらさ」という言葉と深い関係がある若者に着目し、「生きづらさ」という言葉を用いた言説の展開をより詳しく検討する。それらを踏まえて、最後に、「生きづらさ」という言葉に対する見方に関する考察を行う。

研究の方法は新聞（全国紙4紙）の量的・質的分析である¹。新聞を用いるのは、それが幅広い読者を想定しており一般社会における語りを広く捉える対象に適しているから、また、言説の変化を捉える前提として対象の一貫性を保ちやすいからである²。

3. 全国紙における「生きづらさ」という言葉の展開

本節では、「生きづらさ」という言葉がいかなる文脈でどれほど用いられてきたかを概観するべく、新聞記事における使用展開を量的観点から明らかにする³。

まず、「生きづらさ」という名詞並びに「生きづらい」という形容詞の活用形が使われた新聞記事の件数を調べる。すると、図1、図2のように推移してきたことがわかる。すなわち、「生きづらさ」という言葉⁴は、1980年代はそれほど使われていなかったものの、1990年代後半以降徐々に使われるようになった。特に、1997年に山があった。2000年代後半でその使用は大幅に増加した。2010年、2011年は一旦その使用が減少するが、2012年以降は概ね2017年現在も使用が増え続けている。品詞に注目すると、形容詞形のほうが先に使われ始めていること、名詞形が徐々に使われ始めるのは1990年代であること、近年のように形容詞形よりも名詞形の方が用いられるようになるのは2002年を除き2000年代後半からであることがわかる。名詞形の大幅な増加は2012年に見られる。

¹ 読売新聞、朝日新聞、毎日新聞、日本経済新聞を参照した。読売新聞については、「ヨミダス歴史館」という記事検索システム（1986年9月1日以降の全文検索が可能）を使った。朝日新聞については、「聞蔵Ⅱビジュアル」（1985年以降の全文検索が可能）を使った。検索時には、朝日新聞デジタル、アエラ、週刊朝日を除いた。毎日新聞については、「毎索」（1987年1月1日以降の全文検索が可能）を使った。検索時には、週刊エコノミストの記事を除いた。日本経済新聞については、「日経テレコン21」（1981年10月以降の全文検索が可能）を使った。検索時には、日経産業新聞、日経MJ、日経金融新聞、日経地方経済面、日経プラスワン、日経マガジンを除いた。

² 新聞を対象として分析することには様々な注意点があるということが先行研究で指摘されている（たとえば、樋口 2011）。しかし、本研究の目的や先に述べた長所を考えれば、本研究においては新聞を分析するのが妥当であると判断した。

³ 見出しまたは本文に「生きづらさ」という名詞か「生きづらい」という形容詞の活用形が使用されている記事を検索した。検索時に同義語を含めることはしなかった。検索範囲は、各紙の検索可能範囲の開始時点から2017年12月31日までとした。検索時に地域や面、欄の絞り込みは行わなかった。

⁴ 以下、「生きづらさ」という名詞と「生きづらい」という形容詞を合わせて『「生きづらさ」という言葉』と表記する。

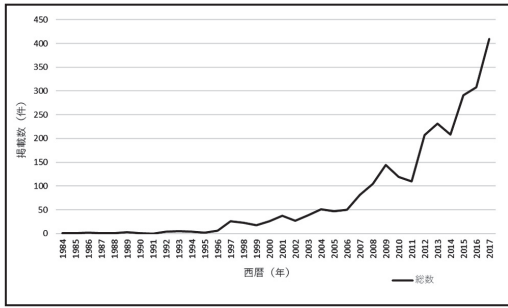


図1 使用件数の推移（総数・4紙合計）

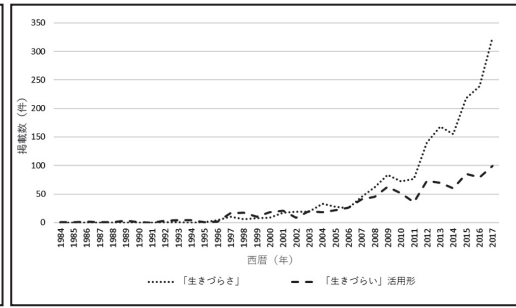


図2 使用件数の推移（品詞別・4紙合計）

表1 各年の記事の特徴づける語

1984		1985		1986		1987		1988		1989		1990	
カゴメ	1.000	シェル	1.000	たい肥	.500	(Tokyo)	1.000	KGB	1.000	(声・エコー)	.333	コマーシャル	1.000
カルピス	1.000	ダッチ	1.000	エノキ	.500	アグネス	1.000	保安	1.000	はく製	.333	財	1.000
ガリバー	1.000	トレーナー	1.000	オオムラサキ	.500	ハンコ	1.000	1つ	.500	アカメ	.333	春秋	1.000
キリン	1.000	バーレル	1.000	タテハチヨウ	.500	ラッシュアワー	1.000	ソ連	.333	カッツオ	.333	惜しい	1.000
キリンビール	1.000	ユーザー	1.000	羽	.500	ロボット	1.000	議長	.333	ハク	.333	徹す	1.000
サントリー	1.000	ロイヤル	1.000	越冬	.500	外人	1.000	閉ざす	.333	印税	.333	役者	1.000
巨大	1.000	一員	1.000	外界	.500	親切	1.000	党	.250	館	.333	利口	1.000
響かせる	1.000	牛耳る	1.000	急ピッチ	.500	部外	1.000	開ける	.200	殺ばつ	.333	TV	.500
軒並み	1.000	契	1.000	紫	.500	光景	.500	協議	.200	水心	.333	お客	.500
資生堂	1.000	原油	1.000	手入れ	.500	エリート	.333	窓	.200	千種	.333	アホ	.500
1992		1993		1994		1995		1996		1997		1998	
[シチュエー ション92]	.333	NIRA	.250	OB	.250	[けい子さん とモーニン グ・ティー]	.500	信田さよ子	.182	アダルトチル	.143	逆手	.083
TOWN	.333	はんらん	.250	ココロ	.250	Eキューブプラス	.500	SHG	.167	助言	.091	ジェンダー	.077
こんど	.333	コーヒー	.250	科技庁	.250	LDT	.500	嗜む	.167	(生活家庭)	.080	男の子	.077
コレクション	.333	シンクタンク	.250	官房	.250	医院	.500	吃る	.167	[生活の医学]	.080	毎週	.074
以上	.333	タイム	.250	更迭	.250	三食	.500	三月	.167	増殖	.080	選択肢	.071
好み	.333	プラスチック	.250	省庁	.250	住吉山手	.500	湿気	.167	自称	.077	負ける	.071
三流	.333	仕付け物	.250	切り出す	.250	昼寝	.500	重森守	.167	大伴閑人	.077	覚悟	.067
仲谷	.333	拡幅	.250	通産	.250	東灘	.500	話し合える	.167	練る	.077	本紙	.067
伝言板	.333	隅	.250	通産省	.250	完べき	.333	外側	.143	大国	.071	欄	.065
八木亜夫	.333	桜並木	.250	入省	.250	近郊	.333	原宿	.143	アダルトチルドン	.065	老後	.061
1999		2000		2001		2002		2003		2004		2005	
通算	.111	面	.083	陥る	.060	拒食	.103	スピーチ	.079	みんなの広場	.082	ライブハウス	.077
会合	.105	人間らしい	.074	普通	.058	過食	.100	闇	.067	受賞	.070	浴線	.077
傷跡	.105	権利	.071	フェスティバル	.054	赤坂真理	.100	法	.067	金原	.061	高円寺	.077
結成	.097	真剣	.071	メンズリブ	.054	摂食障害	.095	恐れる	.065	強烈	.060	中央線	.077
何人	.095	チャンス	.069	アマカス	.051	田嶋陽子	.083	中学生	.060	交う	.060	玄田有史	.073
あざ	.087	アルコール	.067	サラリーマン	.050	トレーニング	.080	明日	.057	手首	.057	風景	.063
ユニークフェイス	.083	女性センター	.067	昨今	.049	公会堂	.080	出場	.054	行き場	.056	香山リカ	.062
横	.083	試み	.059	弱い	.048	中央公論	.077	陳情	.054	芥川賞	.054	分析	.062
亡くなる	.080	薬物	.057	システム	.048	性別役割	.074	ギリシャ	.053	表す	.053	ワークショップ	.060
周り	.068	依存	.056	感動	.048	講師	.073	会津	.053	影響	.050	池田	.053
2006		2007		2008		2009		2010		2011		2012	
改正	.064	フリーター	.124	雨宮処凛	.056	時代	.068	参院	.071	上映	.049	抱える	.074
応援	.057	不安定	.104	高齢	.051	社会	.060	声	.058	活動	.046	人	.071
見つかる	.049	雨宮処凛	.086	若者	.051	県	.060	医	.056	社会	.044	今	.069
(声)	.046	労働	.075	労働	.050	教授	.060	東京	.054	人	.044	感じる	.069
苦手	.044	ニート	.071	現代	.048	生き方	.058	今	.054	人生	.043	見る	.066
読書	.041	雨宮	.068	街	.046	若者	.056	支える	.048	存在	.042	自分	.066
まんえん	.041	強い	.067	優しい	.046	今	.054	代表	.047	抱える	.041	生きる	.062
オールナイトニッポン	.041	作家	.062	不安	.046	現代	.053	話す	.047	感じる	.038	語る	.054
疲れ	.041	収入	.060	悩む	.045	作家	.052	温かい	.047	知る	.038	持つ	.054
蔓延	.041	声	.059	大人	.044	生きる	.051	見える	.046	大きい	.037	思う	.053
2013		2014		2015		2016		2017		数値はJaccardの類似性測度			
県	.091	生きる	.073	抱える	.115	抱える	.101	抱える	.142				
社会	.078	NPO	.073	人	.108	人	.100	人	.129				
生きる	.075	社会	.071	支援	.097	社会	.099	社会	.124				
抱える	.070	支援	.065	県	.093	女性	.089	女性	.113				
テーマ	.068	日本	.062	考える	.079	感じる	.089	感じる	.113				
今	.064	考える	.062	生活	.078	県	.089	思う	.088				
自分	.064	法人	.061	女性	.070	支援	.084	考える	.086				
語る	.062	心	.060	話す	.070	自分	.080	問題	.082				
法人	.061	若者	.059	聞く	.070	子ども	.079	支援	.080				
考える	.060	子ども	.059	若者	.070	若者	.073	持つ	.074				

次に、「生きづらさ」という言葉が他のどのような言葉と共に用いられてきたかを調べる⁵。テキスト型データを計量的に分析するためのソフトウェアであるKH Coder (Version 3. Alpha. 13m) を利用し、各年の記事の特徴づける語を集計した⁶。上位10語は表1の通りであった。ここで注目すべきは、第一に、「生きづらさ」という言葉が、ある時期に特定の「問題」を表す語と強く結びついていることがあることである。例えば、1997年に「アダルト・チルドレン (アダルトチルドレン)」という語が、2000年に「アルコール」や「薬物」、「依存」という依存症にまつわる語が、2002年に摂食障害にまつわる語が、2007年に「フリーター」「不安定」「ニート」という「問題」を表す語が特徴語に挙がっている。2007年・2008年に挙がっている「労働」という語もその三つの語と関連している言葉である。その一方で、2009年以降は、特定の「問題」を表す単語があまり見られなくなった。第二に、「信田さよ子」(1996年)、「雨宮処凛」「雨宮」(2007年・2008年)のように、人の名前が挙がることである。「信田さよ子」は臨床心理士であり、1996年に『「アダルト・チルドレン」完全理解』という本を出版し、それに伴って講演も行っていった。同書の中で信田は、「アダルト・チルドレン」について、「自分の生きづらさが親との関係に起因すると思う人」という解釈を提示している。1997年の新聞記事の中には、「『今の不幸は親の責任』と妙に曲解する“自称アダルトチルドレン”」が「急増」しているとし、その現象を批判的に検討した論を取り上げているもの(日本経済新聞 1997.07.31 夕刊 17頁)も見られる。「雨宮処凛」は格差・貧困問題に取り組む作家・活動家であり、これが、2007年、2008年が「フリーター」や「不安定」、「労働」、「ニート」などの語でも特徴づけられていることと対応する。

次に、人を分類するカテゴリーに着目してその出現率を年ごとに集計し確認する⁷。集計は、KH Coderのクロス集計で行った。集計結果をバブルプロットの形で表すと、図3のようになる⁸。すなわち、「生きづらさ」という言葉に強く結びつく属性として、子どもを示す語や障害や疾患を示す語が比較的早い段階である1980年代後半から、女性を示す語が1990年前後から

⁵ 計量分析にかけた新聞記事は、見出しまたは本文に「生きづらさ」という名詞か「生きづらい」という形容詞の活用形が使用されている記事から次の手順で抽出した。まず、記事の見出しと、「生きづらさ」という言葉の含まれる段落の本文を抜き出した。その際、著作権等の関係上データベースで本文を閲覧できない記事を対象から除外した。次に、残ったものの中から本文が完全に重複する記事を除外した。なお、本文が重複する記事であっても、掲載されている新聞社が異なれば重複とみなさないことにした。そして最後に、各記事の見出しと段落の本文を合わせて、1件の分析対象の記事とした。以上の手順を終え、最終的な分析対象は2,484件となった。分析にあたっては、自動的な語の取り出し処理では抽出できない人名などの語を、あらかじめ「強制抽出する語」として指定した。また、見出し中の地方版を示す語や、セミナーの案内などで繰り返し出てくる「申し込み」「問い合わせ」という言葉などを分析の対象から外すために、あらかじめ「使用しない語」として指定した。

⁶ 各年の記事の特徴づける語とは、それぞれの年において特に多く出現する語である。すなわち、ある年で特徴語として検出される語は、データ全体と比べてその年に特に高い確率で出現している語である。分析にあたっては、KH Coderの「関連語検索」を行った。

⁷ カテゴリーの出現率とは、各年において、それぞれのカテゴリーを示す語が含まれる記事数がその年の分析対象の記事全体の何%にあたるかを表す割合である。集計は、ある属性を示す語(例えば「女性」「女」「少女」などの語)をまとめて一つのカテゴリーと括り(先の例であれば「女性」)、その属性が書かれた記事がどれほどあるかを年ごとに算出するものである。

⁸ バブルプロットの正方形の大きさは、そのカテゴリーの出現率が高いほど大きくなる。

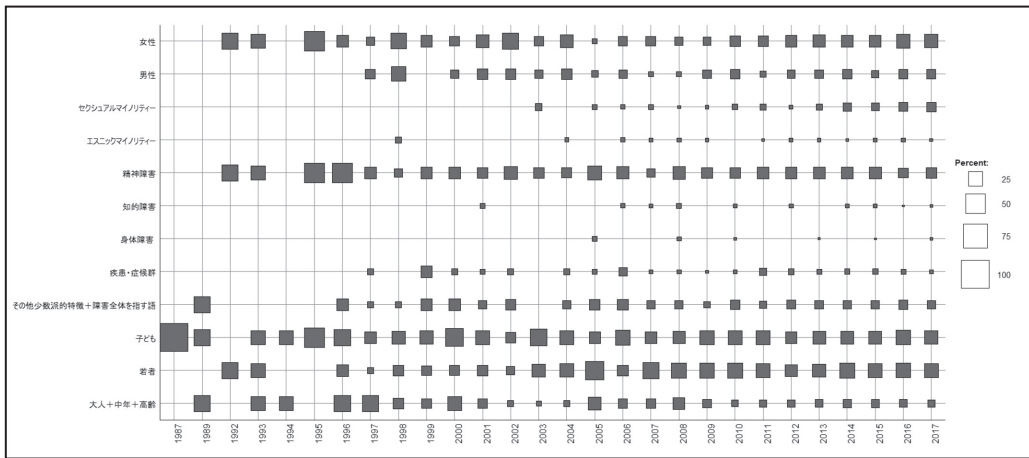


図3 カテゴリー出現率の推移

見られ、今でも継続的に出現している。「障害」を示す語の中では、精神障害を示す語が常に高い頻度で継続して出現している。1990年代前半からは若者を示す語が見られ始め、その出現率は2000年代半ばから徐々に増加し、2007年以降特に大きくなった。1990年代後半から男性を示す語、2000年代からセクシュアルマイノリティーを示す語も継続的に見られるようになった。

次に、「生きづらさ」という言葉の前後に配置されている語の個数を確認する。集計は、KH Coderのコロケーション統計で行った。ここで特徴的なのは、「生きづらさ」という名詞に直接的に続く語である（表2）。「生きづらさ」という名詞の後ろ3語以内に配置される語を見ると、近年は「抱える」が一番多く、「感じる」という語が二番目に多い。しかし、このような傾向は2011年以降のことである。「生きづらさ」の後ろ3語以内に配置される「抱える」「感

表2 「生きづらさ」の後ろ3語以内に配置される「抱える」「感じる」

年	「生きづらさ」という語の出現回数(回)			抱える・かかえる		感じる		年	「生きづらさ」という語の出現回数(回)			抱える・かかえる		感じる	
	回数(回)	比率(%)	回数(回)	比率(%)	回数(回)	比率(%)	回数(回)		比率(%)	回数(回)	比率(%)	回数(回)	比率(%)		
1992	1	0	0.0	0	0.0	0	0.0	2005	24	3	12.5	6	25.0		
1993	2	0	0.0	0	0.0	0	0.0	2006	23	2	8.7	7	30.4		
1994	0	0		0		0		2007	56	6	10.7	5	8.9		
1995	1	0	0.0	0	0.0	0	0.0	2008	70	13	18.6	6	8.6		
1996	4	0	0.0	2	50.0	2	50.0	2009	94	11	11.7	15	16.0		
1997	10	0	0.0	7	70.0	7	70.0	2010	87	14	16.1	16	18.4		
1998	6	0	0.0	2	33.3	2	33.3	2011	90	22	24.4	12	13.3		
1999	8	0	0.0	5	62.5	5	62.5	2012	167	39	23.4	25	15.0		
2000	13	0	0.0	4	30.8	4	30.8	2013	201	36	17.9	17	8.5		
2001	19	2	10.5	6	31.6	6	31.6	2014	200	34	17.0	29	14.5		
2002	21	2	9.5	0	0.0	0	0.0	2015	253	62	24.5	41	16.2		
2003	22	3	13.6	5	22.7	5	22.7	2016	284	53	18.7	38	13.4		
2004	36	8	22.2	8	22.2	8	22.2	2017	367	87	23.7	56	15.3		

じる」の数と割合の変化を見ると、「生きづらさ」という名詞が使われ始めた頃には「抱える」「感じる」が後に続くのが主流ではなかったことがわかる。「生きづらさを抱える」という言い回しが最初に見られるのは2001年であり、2002年を除く1996年～2003年は「抱える」よりも「感じる」のほうが多かった。「抱える」のほうが明確に多くなったのは、2011年以降のことである。

以上のことから、次の三つの仮説が得られる。

第一に、「生きづらさ」という言葉が特定の「問題」との結びつきの中で流布したという仮説である。使用件数の増加が見られた1997年前後には、アダルト・チルドレンに関する言葉やそれを発信する信田さよ子の名が特徴語に挙がっている。使用件数の大幅な増加が始まった2007年とその翌年には、不安定労働に関する言葉やそれを発信する雨宮処凛の名が特徴語として挙がっている。これらのことから、名前の付けられた特定の「問題」との結びつきの中で「生きづらさ」という言葉が使われることが多かったとすることができ、特定の「問題」との結びつきが「生きづらさ」という言葉の流布と関係していると推論できる。

第二に、「生きづらさ」は最初から解決すべき問題とみなされていたのではなく徐々に問題化されてきたという仮説である。本研究で対象とした新聞においては、1980年代に「生きづらい」という形容詞が用いられるようになり、1990年代に「生きづらさ」という名詞も用いられるようになった。「名詞が作られ、用いられるようになることは、特定の現象群を切りとって概念化し、かつそれを定義することであり、問題化のプロセスの端緒である」という伊藤(1996)の論を援用すれば、同様に、「生きづらい」という形容詞から「生きづらさ」という名詞が派生し用いられるようになった1990年代は、「生きづらさ」の「問題化のプロセスの端緒」だったと考えられる。また、形容詞形に比べ名詞形の方が多く使われるようになった2000年代後半に、「問題化のプロセス」がはっきりと始まっていたと考えられる。2011年以降は、それまで頻繁に見られていた「生きづらさを感じる」という表現よりも、「生きづらさを抱える」という表現が主流になった。ここで、辞書で「感じる」という言葉を引くと「外のものごとくにふれて、心が動く。感覚が生じる」という意味が、「抱える」という言葉を引くと「[やっかいなものを]持つ」という意味が書かれている(『三省堂国語辞典 第六版(小型版)』)。このことから、この時期には「生きづらさ」が厄介なものとして語られることが増加したと言える。特に2012年には、「生きづらさ」という名詞の大幅な増加も見られたため、「生きづらさ」の「問題化」がさらに進んだと考えられる。

第三に、2007年～2009年が「生きづらさ」という言葉の使用の転換期だったという仮説である。この時期、「生きづらさ」という言葉を用いた記事の件数が大幅に増加した。また、2009年以降は、特定の「問題」を表す単語が特徴語にあまり現れなくなった。加えて、先に述べた通り、この時期に「問題化のプロセス」がはっきりと始まっていたと考えられる。これらのことは、この時期に「生きづらさ」という言葉の使われ方が大きく変容したことを示しているだろう。

以上の仮説を掘り下げるべく、次節では、「生きづらさ」という言葉が使用されている記事の詳細を読み込み検討する。

4. 若者関係記事における「生きづらさ」という言葉の展開

「生きづらさ」という言葉が使用されている記事すべてを詳細に読み込むことはできないため、ここでは、若者関係の記事に焦点を絞り、「生きづらさ」という言葉を用いた語りの展開をより詳しく検討する。限定する記事を若者関係の記事に決めたのは、「生きづらさ」が若者との関連で語られることが多いからである。「若者」「若い人」「若い世代」「若い子」「青年」「青少年」「少年」「少女」「学生」「生徒」「大学生」「高校生」「中高生」「中学生」「思春期」をここではまとめて若者と表すこととし、前節の分析対象のうち、それらの語が含まれている記事を本節では分析の対象とした⁹。

若者の「生きづらさ」が語られている記事の量的な動向を確認すると、それは図4のように変化していた。この変化の仕方は、「生きづらさ」という言葉が使用されている記事全体と比べると、全体で見られた1997年の山と2014年の谷がないこと、全体で見られなかった2006年の深い谷があることを除き、大きな違いはなかった。

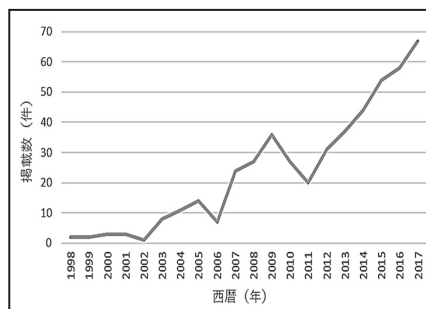


図4 若者の「生きづらさ」が取り上げられている記事の件数の推移

以下、言説の内容の類似性によって時期を区分し、それぞれの特徴を論じる。

4.1. 「生きづらさ」発現期（1998年～2002年）

まずは、若者の「生きづらさ」が語られ始めた1998年から2002年までの記事における「生きづらさ」の用法をたどる。この5年間の記事件数は計11件であり、「生きづらさ」という言葉がまだ社会に浸透していなかった様子がうかがえる。

この時期の記事について指摘しておきたい点は、「生きづらさ」という言葉と関連して語られる特徴的な傾向のある若者のまとまりが見られないという点だ。少年事件に関する2件の記事を除けば、「大学を休んでいたり、定職に就かなかったり」（読売新聞 1998.03.28 大阪朝刊 27頁）、「自ら命を絶ってしまった高校生も、彼氏との結婚に悩む女性も」（朝日新聞

⁹ ただし、記事中に若者を表す語が入っていても、そこで言われている「生きづらい」状況の中に若者が入ると想定されていないものや、その判断がつかないものについては、対象から除外した。また、「誇りをもって生きづらい」などの、「生きづらさ」という言葉が単独で意味を構成していないものも対象から除外した。最終的な分析対象の記事の総計は476件となった。

2001.05.27朝刊 福岡2面 32頁)のように、別々な状況にある様々な若者をまとめて説明する際に使われている。この使用方法はこの時期以降にも見られるが、特にこの時期にその傾向が強い。

また、後の時期に多く見られるようになる、「生きづらさ」を〈どうにかする〉方法¹⁰を提言するものがそれほど見られないという点も指摘しておきたい。「生きづらさ」を感じる若者に「何らかのメッセージを伝えることになれば」(朝日新聞 1999.03.02 朝刊 24頁)というコメントや、「生きづらさ」が生まれる社会や環境を変える必要性を訴える記事もあったが、「生きづらさ」を〈どうにかする〉具体的な方法の提言はこれ以降の時期ほどは無かった。

加えて、このころは若者自身からの「生きづらい」という声が見られないということにも留意しておきたい。

4.2. 「生きづらさ」普及第一期(2003年～2005年)と2006年

次に、若者の「生きづらさ」の記事が増加する2003年から2005年までの記事並びに一旦記事事件数が減少する2006年の記事における「生きづらさ」の用法をたどる。この4年間での記事事件数は計40件であり、「生きづらさ」発現期に比べ「生きづらさ」という言葉が徐々に社会に浸透しつつあることが認められる。

この時期でまず注目すべき点は、世の中の空気が「生きづらさ」の原因として語られるようになった点だ。「生きづらさ」発現期から既に、「生きづらい世の中」「生きづらい環境」などのように、「生きづらさ」は「今」や「社会」と深く関係していた。これに加え、「生きづらさ」普及第一期では、「日本だから生きづらい子もいるし、閉鎖的な日本を離れ、海外に出ることで自立のきっかけをつかむ子も多い」(毎日新聞 2003.03.12 東京夕刊 2頁)、「今はいろんな意味で閉塞(へいそく)感が生じ、若い人が生きづらい時代」(朝日新聞 2005.06.15 朝刊 34頁)など、「今」や「社会」のありようを「生きづらさ」の原因として説明するものが増え始める。

渋井哲也著『男女七人ネット心中—マリアはなぜ死んだのか』の紹介記事において、同書で取材を受けている「生きづらさ」を抱えた若者たちが「現代では『普通』のカテゴリーに入るような人たちだ」(毎日新聞 2005.03.13 東京朝刊11頁)と表現されているように、「生きづらさ」という言葉は特定の「問題」との関係が見られない若者にも用いられている。その一方で、この時期、特定の「問題」との関係が見られる若者と共に用いられ始める。例えば、「不登校」や「ひきこもり」、「ニート」と「生きづらさ」が結びつけて語られ始めた。

これに関連して、若者をサポートする環境の整備が取り上げられるようになった。「ニートやひきこもりのように、生きづらさを感じている若者を、大人たちは地域の仕事や活動へと、積極的に受け入れてほしい」(労働経済学者・玄田有史のコメント, 朝日新聞 2004.12.11 朝刊 52頁)、「生きづらさを感じている青少年に、希望を持って生きていける道筋を与えられるような拠点にしたい」(NPO法人青少年自立援助センター理事長・工藤定次のコメント, 読売新聞 2005.10.24 東京朝刊 多摩面)などである。また、「生きづらさ」という言葉と結びつけられる若者に対する励ましや、心持ちを変えるようにといった助言も見られる。「とか

¹⁰ ここでは、「生きづらさを解消する」「生きづらさを乗り越える」「生きづらさを克服する」「生きづらさから回復する」「生きづらさと付き合う」「生きづらさをしのぐ」「生きづらさに対抗する」「生きづらさを無視する」などを総じて、「『生きづらさ』を〈どうにかする〉」と表現する。

く生きづらい世の中なら、いっそのこと、わずらわしい社会を捨てて、自分の好きなことをしたらいのではないか」(34歳・大学院生の投書, 毎日新聞 2004.02.01 東京朝刊 5頁) のように、「生きづらさ」を逆手に取った行動を呼びかけるものもある。これら環境整備や若者へのメッセージといった「生きづらさ」への対症的アプローチに対して、「生きづらさ」を生み出す社会や環境を根本的に変える必要性を明確に訴えるようなアプローチは、数件を除き、見られなかった。

その他注目に値するのは、「生きづらさ」を「問題」としないどころか「生きづらい」若者を褒め、そこに希望を見出している記事がある点だ。例えば、「世の中の流れにうまくついていけず、生きづらさを感じている人ほど実はユニークで、才能を秘めている」(朝日新聞 2005.10.08 朝刊 東京都心・1地方面 31頁) というように、取り除かれ解消されなければならないものとしてではなく、何らかの肯定的な事象を語る根拠として「生きづらさ」が語られていることがある。

「具体的な悩みもないのに『生きづらい』と嘆く若者が多い」(講演における精神科医・香山リカの発言, 朝日新聞 2004.03.28 朝刊 秋田1面 37頁) などの記事からは、「生きづらさ」の「当事者」自身が「生きづらさ」という言葉を使っていることがうかがえる。しかし、「生きづらさ」の「当事者」自身による発言が掲載されている記事は、イベントで自らのひきこもりの経験を発表する若者の「生きづらさを感じている人に、何かを考えるヒントになればいい」というコメント(朝日新聞 2003.08.21 朝刊 秋田1面 29頁) 程度であった。

4.3. 「生きづらさ」普及第二期 (2007年～2009年)

次に、若者の「生きづらさ」の記事が爆発的に増加する2007年から2009年までの記事における「生きづらさ」の用法をたどる。この3年間での記事件数は計87件で、支援の実践家や社会学者、心理学者、経済学者、運動生理学者、精神科医など幅広い分野の専門家、複数の選挙候補者による語りが掲載されており、「生きづらさ」という言葉が広く使われるようになったことが把握できる。

注目すべき第一の点は、労働や経済に関する社会のありようへの言及だ。「フリーターやニート、今の社会構造のなかで生きづらい思いをしている若い世代が多い。30代でも正規の雇用がない状態である。一生懸命に働いても税金や支払いに追われてしまい、生きている実感を持たず、生きる意味すら見失ってしまいそうになる」(朝日新聞 2007.05.24 朝刊 青森全県・1地方面 29頁) のように、非正規雇用という労働形態が度々言及されており、衣食住の困難や、それに関連する精神的な困難も語られている。つまり、この時期、労働や経済に関する社会のありようが「生きづらさ」を生み出しているという問題提起や、「生きづらさ」を〈どうにかする〉ために「生きづらさ」が生まれる社会や環境を変えようと明言する原因アプローチ的主張が存在する¹¹。また、このこととの関連から、「生きづらさ」という言葉

¹¹ ただし、この時期の記事で「生きづらさ」を〈どうにかする〉方法が語られるとき、そのアプローチのすべてが社会を変えることに傾いていたわけではない。「生きづらさ」を抱える若者の「自立」をサポートする「支援」の存在が取り上げられていることから、「生きづらい」個人を変えるアプローチもあったことがわかる。また、それらの記事からは、「生きづらさ」がそのサポートの対象者を括って言う言葉となっていることも見て取れる。

で形容される「当事者」どうしのつながりや、「自分たちの『生きづらさ』を訴え」（朝日新聞 2007.05.20 朝刊 32頁）る人たちが紙面で取り上げられ始める¹²。

これに伴い、「生きづらさ」の原因や解決方法、「生きづらさ」そのものを探究する動きが見られ始める。「『生きづらさ』ってなんだろう？—悪いのは若者なのか、社会なのか」という題の公開講座（朝日新聞 2007.11.23 朝刊 淡路・2地方面 29頁）や、「経済格差が広がる中で、若者の生きづらさやその解決方法を探」（毎日新聞 2008.11.07 地方版／秋田 20頁）る講演会が開かれた。

4.4. 「生きづらさ」減少期（2010年、2011年）と2012年

次に、「生きづらさ」の記事が減少する2010年と2011年の記事並びに2012年の記事における「生きづらさ」の用法をたどる。

この時期、労働や経済に関する社会のありようへの言及が目立たなくなる。「少子化で子どもへの期待値が高まり、逃げ道がなくなっている」（朝日新聞 2011.01.06 朝刊 38頁）、「『絆（きずな）』や『つながり』が重視されすぎている」（朝日新聞 2012.07.23 朝刊 1頁）など、世の中の空気を指摘するものの割合のほうが大きくなった。

このころ、「生きづらさを抱える若者を対象に、既存の働き方にとらわれない生き方や居場所づくりに取り組む」（NPO法人「YCスタジオ」についての記事、読売新聞 2011.10.15 大阪朝刊 島根面 35頁）のように、掲載される若者へのサポート活動に居場所や集いという視点が加わる。「支援」の枠に収まらない集いも取り上げられている。例えば、NPO法人「フォロ」の取り組みの一つである「生きづらさからの当事者研究会」は、「生きづらい」と感じる若者が集う場であり、「苦しさを共有しつつ、自分にとっての生きづらさとは何かと考える」場である（朝日新聞 2012.10.11 朝刊 31頁）。

「生きづらさからの当事者研究会」のように、主体的な活動の参加者として「生きづらさ」という言葉を前面に掲げる活動が少ないながらも存在する。ひきこもりの若者や家族らの絵やオブジェ、詩などの作品を展示する「ひきこもりART FORUM はじめの一步展」は、「これまで出展者は、ひきこもりの当事者かその家族、友人に限定していたが、今回から『生きづらさを抱えている、あるいは悩んでいる若者と大人』と対象を広げた」（毎日新聞 2012.05.29 地方版／新潟 24頁）。「生きづらさ」という言葉によって、「ひきこもり」というカテゴリーとの関係で表される人よりも広い範囲の人を表すことが意図されている。

4.5. 「生きづらさ」再燃・蔓延期（2013年～2017年）

最後に、若者の「生きづらさ」の記事が増加し続ける2013年から2017年までの記事における「生きづらさ」の用法をたどる。

¹² ここでのキーパーソンは、雨宮処凛である。雨宮は、2007年に著書『生きさせろ！難民化する若者たち』で日本ジャーナリスト会議賞を受賞した1975年生まれの作家・活動家であり、2006年より格差・貧困問題に取り組んでいる。2007年以降に目立ち始める雨宮のイベントの記事では、雨宮が、若者世代の現状の紹介や、「生きづらさ」の解決方法を探ろうと意見交換していたことが読み取れる。「生きづらい」社会を変えようとする雨宮の活動は、労働や経済に関する社会のありようへの問題提起と共になされている。この時期に「生きづらさ」の原因論に労働や経済に関する社会のありようが紙面で多く見られる要因の一つには、雨宮の主張が大きく取り上げられていることがある。

この時期は、寛容な社会や共生社会を構想する語りが以前よりも見られるようになる点が特徴だ。「転んでもやり直せばいいと寛容になれる社会を作れば、ひきこもりの若者たちの生きづらさも少しは解消していくのではないだろうか」(毎日新聞 2017.11.05 地方版/京都 25頁)、「ひきこもりは負の側面だけではありません。『生きづらさ』があるから生きやすい社会が見える。(中略)こうした人たちの力を大いに借りて、だれもが価値ある人間と思える社会を共につくる時代なのです」(「よりそいネットワークぎふ」代表理事・中川健史のコメント, 朝日新聞 2017.06.03 朝刊 13頁)という文章からは、既にある「生きづらさ」を解消あるいは利用、もしくはそれに抗していくなどの対症療法的な面と、「生きづらく」ない社会をつくることを目指す原因アプローチ的な面の両方をくみ取れる。

多様な生き方や「逃げるという選択肢があること」(作家・朝井リョウのコメント, 日本経済新聞 2013.08.04 朝刊 21頁)を知ることで、若者が「生きづらさ」を和らげることや、「生きづらく」ならないようにすることが望まれるようになる点も特徴的である。このアプローチにも、既にある「生きづらさ」を〈どうにかする〉対症療法的な面と、「生きづらさ」が生じないようにする原因アプローチ的な面がある。

4.6. 三つの仮説について

以上の展開を踏まえ、前節に挙げた三つの仮説を再検討する。

まず、「生きづらさ」という言葉が特定の「問題」や人との結びつきの中で流布したという第一の仮説について検討する。若者の「生きづらさ」が語られる記事に焦点を当てれば、「生きづらさ」という言葉の使用件数が増加した2004年前後に「不登校」や「ひきこもり」、「ニート」という言葉で示される若者と結びつけられて多く用いられていたことがわかる。この時期に「生きづらさ」という言葉が使用されている記事全体の中で若者を示す語の割合が増加し始めていることから、「生きづらさ」という言葉が広く使われるきっかけに「不登校」や「ひきこもり」、「ニート」という「問題」があったと言える。これは、日本で2003年に「ニート」が話題となり、「若者自立・挑戦戦略会議」が開かれ、「若者自立・挑戦プラン」が策定されたという社会状況と関係するだろう。この時期に若者の「自立」という文脈で施策が打ち出される中で、若者の「生きづらさ」が〈どうにかす〉べきものとして社会に大きく広まっていったと考えられる。また、この後2007年～2009年に、「自立支援」に代表されるサポートの対象者を括って言う言葉として「生きづらさ」という言葉が使われていることから、これらの「問題」との結びつきの中で「生きづらさ」という言葉が流布していったことがわかる。このように、記事の詳細な検討を通じて、流布の契機として「問題」との結びつきはあったと指摘できる。

けれども、その結びつきは流布の契機に過ぎないと考えられる。1998年～2002年の若者の「生きづらさ」が語られた記事では、「生きづらさ」という言葉は別々な状況にある様々な若者をまとめて説明する際に使われていることが多かった。2003年～2006年の若者の「生きづらさ」が語られた記事では、その言葉が「普通」の若者とも結びつけられている。「生きづらさ」という言葉が使用される初期の段階でこのような傾向が見られたということは、「生きづらさ」という言葉が、元来特定の「問題」と結びつくものでありその後幅広い状態・物事を包摂しうるようになったという単純な経緯を辿ってきたものではないことを意味する。言い換えれば、日常を基盤として発せられる「生きづらさ」という言葉と「問題」について発信する

人の「生きづらさ」という言葉が融合しながら、「生きづらさ」という言葉が使われてきたと考えられるということである。したがって、「生きづらさ」という言葉は、特定の「問題」や人との結びつきの中で流布した側面を持つものの、「問題」との関連からのみで読み解かれるものではないということが言える。

続いて、「生きづらさ」は最初から解決すべき問題とみなされていたのではなく徐々に問題化されてきたという第二の仮説を検討する。1998年～2006年の若者の「生きづらさ」が語られた記事では、「生きづらさ」それ自体が「問題」とされることがあった一方で、何らかの肯定的な事象を語る根拠として「生きづらさ」という言葉が用いられていることもあり、「生きづらさ」自体が「問題」とされていないこともあったことが読み取れる。その後の2007年に、社会のありようが「生きづらさ」を生み出しているという問題提起が数多く掲載されるようになった。このことは、この時期に特に「生きづらさ」が「問題」とされるようになったことと理解して良いだろう。また、この時期には「生きづらさ」の原因や解決方法、「生きづらさ」そのものの探究が行われ始める。これは、「生きづらさ」が解決されるべきものとされていたこと、つまり、問題化されていたことを示唆しているだろう。このように、記事の詳細な検討によって「生きづらさ」が問題化されてきた過程を知ることができた。これは同時に、「生きづらさ」を「問題」とみなすか、また、「問題」とみなすならばそれをどのような「問題」とみなすか、そして、それをいかなるアプローチで〈どうにかし〉ようとするのか、といったことは、単一的に捉えることができるようなものではないということを示している。

最後に、2007年～2009年が「生きづらさ」という言葉の使用の転換期だったという第三の仮説を検討する。若者の「生きづらさ」が語られている記事に絞って読むと、2006年までには「生きづらさ」の原因として「今」や「社会」の空気が語られていたのに対し、2007年～2009年には、それに加え労働や経済に関する社会のありようが言及されるようになった。そこで社会構造への批判が見られるようになったことは、この時期の大きな特徴である。また、これに伴って、「生きづらさ」を生む社会や環境を変えるべきだと明言する主張が見られるようになったことも大きな変化の一つである。それまでは、「生きづらさ」が「問題」とされる場合でも、「生きづらさ」を〈どうにかする〉具体的な方法の提言はそれほどなされていないか、サポート環境の整備など対症療法的なアプローチしか取り上げられていなかったが、この時期には原因へのアプローチが目立つようになった。そうした原因へのアプローチは、これ以降の時期にも継続して見られる。このことから、この時期に人々が積極的に「生きづらさ」という問題を解消しようとし始めたということが推測され、人々が「生きづらさ」に対して持つ認識が以前と比べ大きく変化したといえる。さらに、この時期の後、2010年～2012年に労働や経済に関する社会のありようよりも世の中の空気を指摘するものの割合の方が大きくなったことや、2013年以降に寛容な社会や共生社会の構想、多様な生き方・選択肢の提示など、労働・経済状況への問題提起よりも柔らかな主張・提言が増えたことは、2007年～2009年が先に比べても後に比べても特異なドラスティックさを持っていたことを示唆している。

加えて、2007年～2009年の特徴として、「当事者」の声が記事に多く掲載されるようになったことも挙げることができる。2006年までの記事では「生きづらさ」の「当事者」の言葉が直接掲載されることは稀であったが、2007年には、「当事者」の声も多く掲載されるようになった。「当事者」という存在への注目は、2010年～2012年の間の記事に居場所や集いとい

う視点が加わったことや、主体的な活動の参加者として「生きづらさ」という言葉を前面に掲げる活動が僅かながらも取り上げられるようになったことにつながっていると考えられる。なぜなら、「当事者」の居場所や活動に着目することは、「当事者」を受動的な「被支援者」とみなすのではなく、能動的な主体とみなすことの表れだからである。こうしたことから、2007年～2009年は「生きづらさ」という言葉を用いた語りの転換期だったと言えよう。

5. 総合考察

本論文で明らかになった要点を繰り返す。まず、「生きづらさ」という言葉は、特定の「問題」や人との結びつきの中で流布してきた側面を持つものの、日常を基盤とする言葉として早い段階から存在していたという側面を考慮すれば、「問題」との関連からのみで読み解かれうるものではないということ。また、「生きづらさ」は最初から解決すべき問題とみなされていたのではなく徐々に問題化されてきたため、「生きづらさ」を「問題」とみなすか、また、「問題」とみなすならばそれをどのような「問題」とみなすか、そして、それをいかなるアプローチで〈どうにかし〉ようとするのか、といったことは、単一的に捉えることができるようなものではないということ。そして、2007年～2009年が先に比べても後に比べても特異なドラスティックさを持つ転換期であったということ。

これらを踏まえれば、「生きづらさ」とは何であるのか、「生きづらさ」とはいかなるものなのかを捉えようとするときには、「生きづらさ」を解決すべき「問題」とみなすこと自体をも射程に入れる必要があるということになる。すなわち、どのような人物が、どのような問題意識のもとで、どのようなものとして「生きづらさ」という言葉を使っているのか、といったことを視野に入れる必要があるということだ。そこでは、社会的背景もまた視野に入れる必要がある。なぜなら、2007年～2009年のように、「生きづらさ」言説はその時々での社会的背景と密接に関連し、時期ごとに特徴を形成していると推察されるからだ。こうした視点に立つことは、「生きづらさ」を特定の「問題」との関連から捉えるという見方から我々を解放する。これは、既存の「問題」枠組みでは捉えきれない「生きづらさ」や、特定の「問題」を抱えているとはみなされない人々の「生きづらさ」を知る契機となる。

以上のことは、日々「問題」に向き合う「専門家」「専門領域」における言葉の展開を辿るだけでは明らかにしてこられなかったことである。本研究の意義は、「生きづらさ」を論じる前に「生きづらさ」を問題視すること自体を問い直すよう促すことにある。

【付記】

本論文は、筆者が北海道大学教育学部に提出した平成30年度卒業論文を基に執筆したものである。

引用文献

藤野友紀(2007)「『支援』研究のはじまりにあたって—生きづらさと障害の起源—」、『子ども発達臨床研究』1, pp.45-51, 北海道大学大学院教育学研究科付属子ども発達臨床研究センター。

樋口耕一 (2011) 「現代における全国紙の内容分析の有効性—社会意識の探索はどこまで可能か—」『行動計量学』38 (1) , pp. 1-12.

伊藤茂樹 (1996) 「「心の問題」としてのいじめ問題」, 『教育社会学研究』(59) , pp.21-37.

見坊豪紀・金田一京助・金田一春彦・柴田武・市川孝・飛田良文 編 (2008) 『三省堂国語辞典 第六版 (小型版)』三省堂.

貴戸理恵 (2014) 「「生きづらさ」の増殖をどう考えるか—みんなが「当事者」になる時代」, 『福祉労働』(142) , pp.22-29.

山下美紀 (2012) 『子どもの「生きづらさ」—子ども主体の生活システム論的アプローチ』学文社.

Before Discussing “*Ikizurasa*” : Geneology of “*Ikizurasa*” in Ordinary Language

Natsuki FUJIKAWA

Key Words

ikizurasa, newspaper articles, quantitative text analysis, qualitative text analysis, problematizing

Abstract

This study aims to trace the genealogy of the word “*ikizurasa*” beyond the specialized fields. “*Ikizurasa*” is a Japanese compound word of “*ikiru*” and “*tsurasa*” . The former means “to live” , “to be” , “to survive” , “to exist” , “to experience” , etc. The latter adds the meaning “difficult” , “hard” , and “painful” to the former.

Many researchers have discussed “*ikizurasa*” based on by how the word have been used. However, their premises are limited only to studies of the genealogy of the word in so-called “specialized fields” . Therefore, this study will go into the genealogy of the word “*ikizurasa*” beyond the specialized fields. We will be using newspaper articles for analysis.

First, we overviewed how and in what context the word “*ikizurasa*” has been used in the general society. The overview leads to three hypotheses regarding the genealogy of the word “*ikizurasa*” . In order to develop our understanding about these hypotheses, we examined the development of the discourse in more detail, focusing on articles relating to the youth.

As a result, the following became clear. (1) The word “*ikizurasa*” cannot be understood only in the relation with “the problems”. (2) We cannot understand simply whether “*ikizurasa*” is regarded as “the problem” , what kind of “the problem” when “*ikizurasa*” is regarded as “the problem” , and what should be done to deal with it. (3) 2007-2009 was a turning point for the word “*ikizurasa*” .

These points prompt us to reconsider the viewing “*ikizurasa*” as the problem before discussing “*ikizurasa*” . Standing from this perspective frees us from the view that “*ikizurasa*” is related to the specific “problems” . This allows for us to grasp “*ikizurasa*” that otherwise cannot be grasped by the existing framework, and to learn the “*ikizurasa*” of people who are not considered to have the specific “problems” .